はじめてのラテンアメリカ訪問

2005 年 2 月

下川雅嗣

＜はじめに：WSF＞

今年も卒論・ゼミ論要旨集のために原稿を海外渡航中に飛行機の中で書くことになった。渡航先は、生まれてはじめてのラテンアメリカ、ブラジルである。ブラジルのポルトアレグレ市で第 5 回目の世界社会フォーラム（以下ＷＳＦ）が 1 月 26 日から 1 月 31 日にかけて開かれ、それに参加するためである。世界社会フォーラムとは、先進国の政治家、財界人、多国籍企業の代表、世界銀行やＩＭＦの理事が集まるダボス会議（世界経済フォーラム）に対抗する民衆フォーラムとして 2001 年から毎年 1 月に 10 万人以上もの人々が全世界から集まり、

『もう一つの世界』を構想するための様々な試みを実践する場と言われている。”Another World is Possible”というスローガンの下に開かれており、第 4 回目のみはインド・ムンバイで行われ、それ以外の 4 回はすべてポルトアレグレ市で行われている。今年も 15 万人くらいの人が全世界から集まったといわれている。それだけの大行事であり、人々の将来への希望を語る場であるため、全世界の多くの国々ではその期間中、新聞の第一面の記事になっていたらしい。にもかかわらず、日本の新聞だけはほとんどこれを取り上げなかったと聞き、やはり日本社会の問題性を感じざるを得ない。しかしながら、私はここで、この世界社会フォーラムの報告をやろうと考えているわけではない。そもそも普通の日本人がこれに関心を持ってないことはゆゆしき問題だとは思うが、このフォーラム自体が本当に社会を変える力を持っているかどうかについて断定できないし、そもそもフォーラムで行われたようなフォーマルな会議やセミナーや議論は、あまり私の性に合わないので（というか退屈なので）、実はほとんどきちんとは参加しなかった。そん

なことを書くと、今回の渡航費は大学から出ているのでどこかからお叱りを受けそうだが、ここに以下書くことを読んでいただくとそのお金を有効に使ったと思っていただけると期待する（余計、お叱りが大きくなるような気もするが…）。そこで、私がこの機会に WSF の周辺で、どんなグループと接し、何を見て、何をして、何を感じたかを分かち合いたい。さらに、その分かち合いが実は今年のゼミ論・卒論と関係している部分が多々あるので、それらの論文の紹介も兼ねることができるのではと思っている。ただ私の体験に絡まる論文だけしか紹介できないので、全部の論文を紹介できるわけではない。また紹介されるか否かと論文の評価は無関係であるので、その辺は了承願いたい。

＜No-vox＞

ＷＳＦの始まる 2 日前に現地入りし、まず私は No-vox (声無きもの)という緩やかなネットワーク組織とともに動いた。この No-vox というネットワークは、フランスの野宿者運動団体(ex. DAL)、失業者運動団体(ex. AC!)、及び移住労働者運動団体がコーディネーターになり、ポルトガルやイタリアなどＥＵ圏での貧困者運動団体、そしてインドのダリット運動団体、日本の野宿者運動団体などが緩やかにつながり、国際的な『持たざる者』連帯のネットワークを構築しようというもので、数年前から様々な場で国際連帯行動に取り組んでいる。今回、No-vox は、現地の野宿者当事者運動団体（MNLＭ:Movimento Nacional De Luta Pela Moradhia：居住のために闘う全国運動)と共に、ＷＳＦの始まる前の 1 月 25、26 日にポルトアレグレで、『持たざる者のフォーラム』を開催し、その後ＷＳＦの開催期間において、そこに集まった全世界の人々に『持たざる者』の存在をアピールする実際的行動という形でＷＳＦに関った。No-vox は、ＷＳＦに対して、片足を中に片足を外に置くという形で関ってきている。No-vox は、「WSF は持たざる者の運動としては好ましい場ではない。なぜならばわれわれが模索しているような持たざる者のネットワークを提供してくれない。ＷＳＦに貧困者の居場所がほとんど存在していないからだ。一口で言うと WSF は中流階級のフォーラムだ。しかし、それでは、つまり持たざる者が存在しない運動だったら、ＷＳＦがスローガンにしているもう一つの世界（Another World）は不可能である。よってわれわれは、このＷＳＦの機会を利用して持たざる者のネットワークや運動を実際に作っていく場所にしたい。」と考えているのである。

＜MNLM＞

さて、上述した集まった全世界の人々に『持たざる者』の存在をアピールする実際的行動であるが、具体的には、ＭＮＬＭ市がポルトアレグレのホームレスのために１月２５日未明にポルトアレグレ市の中心街にある旧政府社会保障省機関の空ビルを占拠することで始まった。これはもちろんＷＳＦにポルトアレグレ市のホームレスの存在を示す、と同時に彼らの住む場所を実際に確保するためでもあった。占拠突入は約 100 人くらいで行い、実際に住むのは 50 世帯くらいだと言う。実は私は予定が早まったため突入には間に合わず、私が到着した 25 日昼は、すでに突入後で、そのときには、まだ警官隊が多数バリケードを張っていて、それ以上の野宿者及び外国人(No-vox支援者)が中に入らないようにしていた。この実力行使は、日本人の感覚からするとかなり過激に思えるが、農村における土地無し農民運動（ＭＳＴ：Movimiento sin Tierra）[1]の都市版で、当地では日常茶飯でそれほどでもない。ここでＭＮＬＭの紹介を少ししておくと、この運動は主に都市の空ビルまたは空き地を占拠してそこを自分たちの住宅にする活動をやっている。これは、このような空ビルが多数存在するからできる運動（ポルトアレグレ市だけで 1000 くらいの空ビルがある）で、各都市に拠点を持つ全国当事者組織である。現在までに約 30 万世帯が参加し居住を勝ち取っている。用意周到に計画をし、ブラジル全体では２週間に１ビルくらいの割合で占拠を行っていると言う。また彼らはただ居住を確保するというだけではなく、都市での生活全体を守り、共同体を育てることも同時に狙っている。彼らの挙げている５つの主要課題は次の通りである。

①ビル占拠。ただし占拠するだけではなく全体のプロセスを大切に。つまり組織化の準備、占拠後のコミュニティーづくり等。

②占拠後の抵抗。これによって永続的な住居にできる。

---

[1] 田辺さんのゼミ論参照。

③都市の土地所有をより公平にするための規制化の実現
④新技術の開発（環境と調和する都市での生活方法、Housing の新しい技術の開発）。
⑤協同組合の強化。たとえば信用協同組合を作り、共同でお金を管理する。 社会的経済のモデル（Social Economical Model）を作っていきたい。

なお、ＭＮＬＭは、2002 年にポルトアレグレで行われたＷＳＦの際にも空きビルを占拠することによって持たざる者の存在をアピールし、その後現在に至るまで、そのビルに６８世帯が住み続けている。さて、今回のその後の経過は、２５日午後 3 時から再度の交鈔（国連役人、ポルトアレグレ市長とＭＮＬＭの交渉）が行われ、その結果、ＷＳＦの終わる 2 月 1 日までは占拠していても良い、その間水道を供給するとの約束を得る。一部にその約束で引き下がることに異論もあったが、とりあえずこれで妥協し、ＷＳＦの期間中にこの件を既成事実化・社会化することによってこのビルを確保することにした。その後外国人も中に入れるようになり、私も翌日は中に入り、また一緒に行った日本からの活動家もＷＳＦの期間中そこに宿泊（タダ！）した。なお、思惑どおりこれは地元の新聞の一面に写真入りで載る。占拠した人々は早速地下に炊事場をつくり、2 日目から共同炊事を行いながら共同体づくりに着手した。参加者一人ひとりが主体的にこの運動に関っていることに感銘を受けた。

＜WSF デモに対する貧困者の存在アピールとデモ＞

ＷＳＦは、２６日の夕方から行われる約１５万人が参加する大規模デモ（というより、お祭りウォークのようなもの）で開始した。No-vox 及び MNLM は、ただデモに参加するよりは、ちょうど占拠ビルの前をＷＳＦデモが通るので、デモ隊が通る間はビルの窓及びその前の道路より一段高いところで『持たざる者』のプレゼンスを示し続ける方が効果的であると判断し、デモには最後尾につくことにする。デモは大規模で、デモ隊がその前を

通り続けるだけで３時間ほどかかり、その後私たちもデモに加わって約２時間は歩いた。その間の主なシュプレッヒコールは①Ocupar, Resistir, Para morar (占拠、抵抗、居住のため)、②土地改革を実施しろ、③闘いを通して平和は勝ち取れる、の３種類だった。当初の判断は正しく、非常に目立つところで、多くのデモ隊が注目し、大いなる歓声、拍手を浴びた。しかも私自身はデモの全景を見ることができた。またかなりメディアもやってきて、私も 2 回ほどテレビのインタビュー（ブラジルとフランスのＴＶ）に答えた。なお、占拠ビルの中の家族には子供もかなりいて、小さな子供たちがシュプレッヒコールを一生懸命あげている姿は印象的だった（写真５参照）。喉

が潰れても、子供たちがシュプレッヒコールをあげだすとやめるわけにはいかなかった。家族ぐるみのシュプレッヒコールには非常にエネルギーがあり、まさに一生がかかっている叫びだった。その後最後尾（実際は後ろから５つ目）についてデモも行ったが、これも何でもありのデモで非常に楽しかった。デモをすることによって貧困者が一体感を覚え、また本当に元気になっていくことを実感した。日本のデモではそれを体感することは難しそうに思い、その違いが際立っていた。

（占拠ビルのその後：ＷＳＦ最終日の１月３１日にポルトアレグレ市の住宅局に No-vox として交渉に行く。その際に、この占拠には国際ネットワークが支援しているので、排除したら大変なことになるとプレッシャーをかける。しかし、２月１４日にポルトアレグレ市は、占拠ビルからの追出しを実行しようとした。これに対して、帰国した No-vox の仲間たちが、フランス、ポルトガルのブラジル大使館へのデモを予告し、各国からの抗議文を送ることによって、行政の排除を現在のところ阻止している。）

＜MST 設立 25 周年記念＞

さて、もう一つどうしても書きたいことがある。ちょうどＷＳＦ開催中の日曜日（３０日）にポルトアレグレから約 130Km離れた農村で、ＭＳＴ（土地無し農民運動）設立２５周年記念集会があるので、ＷＳＦを抜け出して参加しないかと誘われ、それに参加してきたことだ。その場所は、25 年前に始めて占拠した農場だそうだ。ＭＳＴの概略をするとMSTは土地を持たない貧しい農民たちが、使用されていない土地を占拠し、そこにとどまり続けることによって土地を求める権利を追及していく運動である[2]。MSTの行動はまず野営から始まる。数十家族まとまって、自分たちの土地を手に入れるまで、占拠予定地の近くにテントを張って座り込む。そうして来るべき占拠の日

[2] 詳細は田辺さんのゼミ論参照及び参考資料参照。

までの間、共にテント村を組むメンバー間で教育活動を行う。そこでは、自分たちの置かれている状況を自ら認識すること、社会への批判意識をもつこと、運動の意義を理解することを目指す。そして時期が来たら、空き農地の占拠を行う。こうして現在、約 40 万世帯が土地を手に入れ、10 万世帯が野営状態で待機しているという（総計 250 万人）。土地を手に入れた後もMSTの活動は続く。住民グループを組織し、農産品をどう生産していくかその中で相談して決める。協同組合を作り皆で生産活動を行っていくのである。また、インフラ整備、教育、公衆衛生などについてもこのグループで協働して取り組んでいく。運動によって手に入れた土地では有機農業を行い、農薬や化学肥料は一切使用しない。それは一人一人が自然環境に対する責任を自覚しているからだ。これらのプロセスにおいては、一貫として、「学びは理論ではなく生活実践の中から自然に生まれるべき」「まず自分たちの置かれた状況を理解することから歩みは始める」とするパウロ・フレイレの教育学・意識化教育がベースになっており、参加者一人ひとりが主体的に資本主義ではなく平等で社会主義的な社会の建設（building the egalitarian and socialist society）を目的として意識しているのが感じられる。もともとルラ・ブラジル大統領はこのＭＳＴ運動を応援していたし、ＭＳＴは彼の支持基盤の一つである。しかしながら、ルラ政権になってからも実質上の農地改革はまだなされていないし、それどころか現政権になってこの 2 年のうちに農地獲得闘争の中で 68 人が殺されている。

さて、設立 25 周年記念集会であるが、数千人もの人々が集まってきていた。過去に占拠した農場の中の道を、列をなして延々と歩き会場へ向かう。集会の始まりは演奏される音楽にあわせて海の中での踊りで告げられる。その後、

広場に設営された会場でそれぞれのスピーチが行われた。まず MST の事務局、その後、ブラジルの中で農地改革に積極的な近隣の州の知事の演説（内容は、民営化と遺伝子組換種子への反対の表明）、MST のリーダーの演説、ベネズエラの農業大臣、ブラジルの農地改革大臣、ベネズエラのチャベス大統領の演説と続く。その中で特に印象的だったのは 2 つあって、まず MST のリーダーの話が素晴らしかった。さすがにこの大きな運動の精神的支柱だけある。その要点を箇条書きにすると次のようなものだった。

・もともとここは何も生み出さない、蚊だけを生み出す土地だった。それが今や有機穀物を生み出している（MST は、むやみやたらに土地を占拠する運動ではなく、長い間ただ

大地主に所有だけされて、全く使われていない土地のみを占拠する。この原則はMNLMも同じである）。

・現代の農業は2種類ある。ひとつはアグリビジネスに管理された農業（control agriculture）で、もうひとつは小規模循環型農業である。管理された農業では、企業がすべてをコントロールし全世界で同じものが作られ、消費される。なぜ全世界で同じものを食べる必要があるのか。もともとその地域にあったものが作られ、その人々の口になじんだものが食べられるのが自然だし、人間らしいのではないか。我々は後者の農業を目指す[3]（実際彼らは、自給自足のための農作物をつくり、その余力で出荷用の米を作るのを原則としている）。

・チャベス大統領に対して：あなたは農地改革を行った。それはすばらしい。ブラジルではまだ行われていない（とブラジルの農地改革大臣を見る）。ベネズエラでまず農地改革が行われ、次にブラジル、そしたらラテンアメリカ全体の農地改革が可能になるだろう。ベネズエラに関して言えば、農地改革の後は、教育改革が必要ではないか。ただアメリカ流の教育は意味がない。貧しい人が力を持つための教育、平等で社会主義的な社会を作るための教育が必要だ。そのための改革である。また管理型農業ではなく循環型農業を教えるための教育、シモン・ボリバルの歴史、さらにラテンアメリカがこのような状況におかれていることが意識できるような教育が必要だ。我々が置かれている状況を意識することは貧困者にとっての強力な武器である（consciousness of our situation is the strong weapon）からだ[4]。

＜ピケテロス＞

もう一つの印象的だったことは、ベネズエラのチャベス大統領の話の途中にアルゼンチンのピケテロス（Barrios de Pie）の一団が大きなフラッグとともに大歓声の中で入場してきたことである。アルゼンチンのピケテロスという運動は、2002年アルゼンチン経済危機以来盛んになってきている新たな民衆運動であ

[3] 吉田真子さんの卒論に非常に通じるものがある。吉田卒論で綿密に調べられたことを農民達がきちんと意識化して反対していることに驚きを感じる。一部田中さんのゼミ論にも関係する議論。

[4] 糟谷さんの卒論で論じようとした方向性の行き着く先がこのＭＳＴリーダーの教育に関するメッセージにあるように思う。

る。今の新自由主義的グローバリゼーションが進行した時代においては、以前のように労働組合がストをやって資本家や政府と闘っても単に、その会社が倒産するだけで、なんら労働者や貧困者にとって利益にならない。その代替として、道路を封鎖することによって、

政府やら多国籍企業等の資本家に圧力をかけるという運動である。つまり、道路封鎖で貧困者は困らない、困るのは外資系企業及び国内富裕層のみであるということらしい。私の師匠であるアンソレーナ師は、今の新自由主義的グロ

ーバリゼーションの問題にきちんと対峙して、それを変える可能性を持つ大きな力のある運動は３つあると紹介してくれたが、その２つがこのブラジルのＭＳＴとアルゼンチンのピケテロス運動であり[5]、この２つの運動が、ＷＳＦ開催期間中にその裏でお互いを意識して出会っているのである。さらには、昨今の新自由主義的グローバリゼーションの中で、特に貧困層の視点にたち、それを意識した上で実際的な農地改革をやろうとしているベネズエラのチャベス大統領や農地改革に積極的なブラジルの州知事、さらに、ボリビアのコチャバンバで水の民営化の阻止を闘った人々[6]やらも集合しており、しかもそれぞれの運動が主体的にかつ、しっかり新自由主義的グローバリゼーションとアメリカの帝国主義を見据えた意識化がなされていることに感動を覚え涙した。またシモン・ボリバルのラテンアメリカ解放の思想は、まだ脈々と人々の中に生きていると感じた。

＜ラテンアメリカの People's Process＞

私はこれまでアジアの貧困者自身の運動に関心を強く持ち、ラテンアメリカはあまり知らなかった。そしてアジアの貧困層においては、日本人を含め先進国の人々はあまり知らないが、共同体を基盤として、創造的で主体的な People's Process（人々自身の歩み）が大きく発展していることを授業やゼミを通して学生に伝えて来た。また、その可能性を見ようとして見ないからその現実が見えないのだと教えてきたつもりである。それに対して、

---

[5] もう一つは、メキシコの先住民運動（サパティスタ）である。

[6] これについては、黒川さんの卒論参照。なお、この集会参加者の話だと、コチャバンバの農民もこの闘いを機に、新自由主義的グローバリゼーションの問題がきちんと意識化され、先の新自由主義的グローバリゼーションの問題にきちんと対峙して、それを変える可能性大きな力のある運動の 4 つ目にこの農民たちも入るのではないかと言われていた。

ラテンアメリカは行ったことがなかったので、ラテンアメリカを研究している学生や研究者が、ラテンアメリカでは、共同体を基盤としたような創造的で主体的な People's Process は難しいと言われてそれをかなり鵜呑みにしていたところがある。今回初めて行って感じたことは、アジアの People's Process とは特徴は異なるが、ラテンアメリカにも共同体を基盤とし、創造的で主体的な People's Process（人々自身の歩み）は立派に存在しているじゃないか(！)ということである。またそれが日本にはほとんど伝わってきていないとも思った。このような運動参加者一人ひとりが意識化され、主体的に関っているラテンアメリカの運動を追うことは、もしかしたらアジアの運動よりも面白いかもしれないとさえ思う。ゼミの中で、黒川論文では、その底流に「新自由主義的グローバリゼーションの進行に伴う水の民営化の問題点とそれに対する対抗手段がほとんどない状態というやり場の無い思い」が感じられるし、また島田論文においても、アメリカの介入に対して如何ともし難い様子が感じられたが、どうしてどうして、ラテンアメリカの民衆は社会を変える力を未だに持っているという希望を感じた。

なお、私にとってははじめてのラテンアメリカだったし、あまりラテンアメリカには詳しくないので、以上述べたことは基本的なところを間違っている可能性もある。もしイスパニア語学科の学生やポルトガル語学科の学生で、私の間違いを教えてくれる人がいれば幸いである。また、実は私は、アジアよりもこのようなラテンアメリカの運動の方に興味が強いのではないかと心配している。しかし、スペイン語もポルトガル語もできない私にとって、今回もかなりしんどかったのだが、これは致命的である。将来的にこのようなことに興味を持つ人が出てくれて、通訳・翻訳をしてくれるような人がいれば幸いと思うしだいである。というか現地で何度ゼミ生の皆さんの顔を思い浮かべたことか…。

参考資料
吉田亜矢子『MST リーダー来日の際の講演速記録』

ブラジル「土地なき農民運動（MST）活動家との交流の集い」
2003.10.6　　文京区民センターにて　Ciro Correa 氏による

以下は、2003 年 10 月 6 反グローバリズム国際連帯行動の一環として行われた、ＭＳＴ活動家 Ciro Correa 氏と日本の野宿者・日雇労働運動に取り組む人々との交流会の模様である。前半は、Ciro 氏の講演の内容。後半は、日本の活動家や野宿当事者との質疑応答及び討論になっている。

■ブラジル農村部における下層労働者の現実

ブラジルでは、人口のわずか１％の人々が国の 50%の富を独占していると言われている。広大で豊かな土地を持つ国であるにも関わらず、ヨーロッパ人によるアメリカ大陸「発見」以来 500 年に渡って人々は搾取され続け、貧しい生活を強いられているのである。

またブラジルは、奴隷解放が 88 年ととりわけ遅く、農地解放も未だなされていない。多くの人々は住まい、公衆衛生、教育などへのアクセスを持てずにいる。

■MST の活動

ＭＳＴは農業労働者の土地を求める権利を追及していく運動を行っている。土地を持たない貧しい農民たちが、一定の土地にとどまり続けること、土地を取り戻すことができるよう支援しているのである。

農地解放のなされていないブラジルには、生産が行われていない土地、奴隷労働を行っている農場、環境破壊型農場が数多くあり、法律上これらは違法とされている。ＭＳＴは政府に圧力をかけ、それらの土地の所有者にその所有権を放棄させ農地解放が行われるよう促す役割を果たす。また、直接それらの土地を占拠して農民たちが自分の土地を得られるような活動も行う。

ＭＳＴ発足から 20 年。それはブラジル植民地支配 500 年の歴史そのものであった。
国家権力や大土地所有者、資本などからの圧力をうけくじけそうになったころもあったという。ＭＳＴの組織はブラジル全土に展開しており、全国 27 州中 23 州にその支部がある。ちなみに支部のない 4 つの州はアマゾン地帯である。各支部の活動はそれぞれ独立しているが、1 つの州で行われた行動が他州にも波及するなどつながりを持ちながら運動を行っている。

まずＭＳＴが力を入れているのは、州政府による農民の他州への追い出しに抵抗することである。この際、代表者をおいてその下で皆が動くのではなく、参加型・協働型であるべきと考え、それぞれが議題を決めて行動していくように心がけている。

また教育にも力を入れており、特に若い世代に運動の意味を教えることに取り組んでいる。理論だけでなく実践することを重視し、農業活動と運動の 2 つの面について学べるようにしている。

活動の中には即対応が迫られている短期行動と、中・長期行動があり、ラ米や世界中の運動体との結びつきも強い。

■MST の活動手法

ＭＳＴの行動はまず野営から始まる。自分たちの土地を手に入れるまで、占拠予定地の近くにテントを張って座り込む。何年もこの状態が続くこともあるそうだ。そうして来るべき占拠の日までの間、共にテント村を組むメンバー間で教育活動を行う。そこでは、自分たちの置かれている状況を自ら認識すること、社会への批判意識をもつこと、運動の意義を理解することを目指す。またこの間、政府や大農場主との交渉、大規模な反スト、道路封鎖などを行うこともある。大農場のみならずビル占拠も行う。

こうして現在､30 万世帯が土地を手に入れ､10 万世帯が野営状態で待機しているという。

土地を手に入れた後も MST の活動は続く。住民グループを組織し、農産品をどう生産していくかその中で相談して決める。協同組合を作って、皆で生産活動を行っていくのである。また、インフラ整備、教育、公衆衛生などについてもこのグループで協働して取り組んでいく。

以上の過程に関わるすべての農民が、MST のメンバーである。

運動によって手に入れた土地では有機農業を行い、農薬や化学肥料は一切使用しない。それは一人一人が自然環境に対する責任を自覚しているからだ。それぞれが「毒の入ったものはテーブルの上に乗せない！」という意識で生産している。

また、ここで行われている教育は先にも述べたように理論と実践の両方を学べるものになっている。これは、「学びは理論ではなく生活実践の中から自然に生まれるべき」とするパウロ・フレイレの教育学がベースになっている。

MST は、ポルトアレグレで行われた世界社会フォーラムの実行団体であるヴィア・コンペシーナという世界的農民運動の連合体としても活動しており、農業自由化・生物種の特許・遺伝子組み換えに反対する立場を取る。

■Ciro 氏のブラジルでの活動をもとにした教訓

1．　一人一人が主役になって参加する

そのために鍵となるのは情報。それぞれが現状を認識し、運動の意識化をすることが重要である。「なぜ、何に対して闘うのか」を理解できていなければならない。

2．　シンボルの創出

闘いをシンボリックに表すもの、それを見ると闘いを思い返せるようなもの、皆の気持ちを統一できるようなものを創出する。歌・旗・Ｔシャツ・手帳など。

3．　一人一人の背負ってきた文化の復興

　それぞれの出身地の伝統的文化を再評価する。皆それぞれの創造性を持っているはず。それを活かせる場や機会を設ける。

4．　権力・責任体制を組織に集中させない

　一人一人がそれぞれ役割を担ってきちんと実行しながら運動していけるようにする。それぞれが、仲間である他者に対して責任を負う。これを実現するためには、教育が必要である。

5．　目標を表や図にして誰にでもわかるように

　例えば、どの行動がいつまでに達成されるべきか皆が見られるカレンダーなどに記す。それが達成できたらメンバー全員でお祝いする。目標を達成した喜びを皆でわかちあう。

　運動体にはそれぞれの方針があり、差はあるけれど「現在のあり方はおかしい。かえていこう」という面は皆同じである。それぞれが方針を打ち立てて、継続・達成できるような形でやっていけばいい。

■質疑応答

Ｑ，都市・スラムの労働者とＭＳＴの関係は？

Ａ，ブラジル都市部では、近年運動が活発化している。団体としては、ＭＴＤ（失業者運動）とＭＴＳＴ（家なき労働者運動）があり、後者はＭＳＴとも交流がある。運動理論について話し合ったり「知恵の交換」を行ったりしている。

都市部では実質 20%の人々が失業状態。インフォーマルセクターに従事する人々も多く、正規雇用でない彼らには社会保障がない。スラムにさえ住めず路上で生活する人々も数多い。来年、ＭＳＴは大都市でもプロジェクトを始める予定。都市部にいる元農民に運動に参加してもらって、土地を取り戻してもらおうというねらい。また、サンパウロ市内に近年市民運動センターができた。ここでは全国の市民運動の情報を集約し、運動カレンダーなるものを作成している。

Ｑ，農作物がとれない時はどうしているのか？

Ａ，ブラジルは、冬雨多く、夏乾季という気候。北東部、特に奥地は旱魃地域である。

そこの農民は経済的困窮と飢えに苦しみ、翌年の種となる作物さえ食べざるを得ない。土地を失って都市に行く。

ただしＭＳＴの定住生産地では計画的に生産を行っているのでそのようになる心配はない。

Ｑ，MMCという廃ビル占拠などをしている団体と交流し感銘を受けたがＭＳＴと関係はあるのか？

Ａ，初耳である。設立の経緯で進歩的カトリック教会（解放の神学系）からの支援があったが、ＭＳＴは政治的・宗教的に中立。また知識階級からの支援も受けている。
90 年代から若者の参加が目立つようになり運営分野や技術分野などそれぞれに合った参加の仕方をしている。

■討論（●は日本の活動家、○は Ciro 氏の発言）

●野宿者にとってグローバリゼーションとは何か？それが、なかなか目に見えてこないものとしてある。意識化は重要である。今、「失業―野宿」をもたらすものと、世界における貧困を、能書きではなく、現場で野宿労働者自身が意識できるような運動にしたい。

●Ciro 氏の講演は非常に示唆に富んでいて、耳が痛い思い。特に教訓１と４はすごく難しい。３についても、野宿者は過去を封印したがったりしてなかなか難しい。そのような点で運動の豊かさを感じた。

「運動の意味の意識化―なぜこんな状況なのか？」それぞれ個人的経緯もあるかもしれないが、もっと大きな枠で捉えなければならないだろう。日ごろ行政を相手に活動することが多いが、行政はあくまで目の前の敵であり、もっと広い意味での敵に対して闘っていく姿勢が身についてきたらいいと思う。

●何年間か日本の野宿者運動は前進が阻まれてきた。ブラジルで「これはしてやったり」という活動があったら教えてほしい。

○すべてが多くの人々との協働作業で勝ち取ってきたもの。
自分自身は、大学近くに占拠地ができて意識するようになり、様々な学部の学生・教授と共に寄付などしていた。卒業後は就職せずＭＳＴに入り占拠地で暮らした。(Ciro)

●警察などに弾圧され、逮捕されたときどんなバックアップ体制をとっているのか？

○ブラジルでは上流階級の人々が法律を作って動かしている。貧しい人々は遠い存在であり、彼らの発想にない。私たちの活動は彼らにとって犯罪行為とみなされる。権力を持っているのは保守的な右派が多い。「鶏一羽盗んだ人は何年も刑務所暮らしなのに人民の富や未来を盗んだ人は自由なまま」という言葉もあるくらい。海外・国内 NGO などからの支援はある。(Ciro)

●山谷では 84 年と 86 年に 2 人の活動家が右翼によって殺された。失って初めて得られるものがあると気づいた。2 人の死によって映画「山谷ーやられたらやり返せー」の普及、思いの強まりが生じた。彼らの遺志引き継ぐことが大切。ラテンアメリカではプレシェンテという言葉がある。弾圧、闘いの中で倒れていった仲間の遺志を引き継いでいくという意味だ。MST は世界規模で見てもラディカルな運動だと思う。

○気をつけてもらいたいのは衝突の中で決して無謀な行為はしないように。
多くの人々が殺されたけれど、彼らの遺志を引き継いでいくことを皆考えている。パウロ・フレイレ、ジョズィーノ神父など活動家ではないけれど記憶に残る人々もいる。

彼らが残したものを引き継いでいきたい。定住占拠地や、そこに立てた学校に闘いの中で死んでいった人々の名前をつけたりしている。日々の活動で、リーダー的存在で暗殺された人などを常に思い出して語り継いでいく。次の運動を引き継いでいく人々が、どういう人間であるべきかを学ぶプロセスでもある。(Ciro)

●日本では野宿者こそ反グローバリズムの最前線。日々の暮らしは苦しいけれど、その存在自体が主張となり、一般の人々に呼びかける役目を担っている。

○世界の人々の連帯。それこそが政治的力になる。(Ciro)